

(1) 小委員会

企画小委員会； 支部役員選出方法及び役員候補者案，支部事業の実施計画，支部規則案の検討，具体案の策定。

学術運営小委員会； 講演会，見学会，研究会などの実施計画の策定，ISIJ情報ネットワーク記事の編集計画を立案，推進。

財務広報小委員会； 支部補助金算定方法案の検討，答申案のとりまとめ。

(2) 研究会

材料物性工学談話会； Flex-crystals教授講演会*，メカニカルアロイング*，高純度IF鋼*，ナノスケール・キャラクタリゼーション*，先端複合材料（材料の積層化）*，イオンビーム・陽電子を利用した材料研究*などを主題とした研究会の実施。

鉄鋼プロセス研究会； 連続鋳造法，熱交換機におけるCu/Alの腐食*，アルミニウム複合材料*，ニューロファジ・AI技術，エンドユーザ・コンピューティング，半溶融/半凝固加工を主題とした研究会の実施

材料化学研究会； 鉄鋼プロセス研究会と同一テーマの他，分子軌道法とその材料化学への応用，機能性めっき，固体電解質を主題とした研究会，大学院学生による研究報告会などの実施。

材料開発研究会； 材料物性工学談話会と同一テーマのほか，チタンとその合金，アルミニウムの表面改質を主題とした研究会の実施。

関西分析研究会； 光焦電分光法，常圧光電子分析法，原子・分子レベルに近づく電子材料開発と評価技術，EXAFS分光の無機材料への応用，金属イオンとグリセリンの反応を主題とした研究会，また最新の分析化学講習会“NMRの最新の進歩”*の実施。

(3) 講演会および見学会

第1回**，湯川記念講演会；“我が国鉄鋼産業と大学の21世紀に向けての課題”（阪大 森田善一郎氏），“都市再開発と超々高層ビル”（竹中工務店 原 喬氏）。

第2回，講演会；“結晶粒成長の制御とコンピュータ・シミュレーション”（東北大 西澤泰二氏），“最近の高性能磁石について”（住友特殊金属 田口 章氏）。

第3回，湯川記念講演会；“超耐熱合金と超高温材料—研究

と開発の動向”（超高温材料研究センター 田中良平氏），“スラグの塩素度について”（東北大 萬谷志郎氏）。

第4回，講演会；“加古川製鉄所におけるシステム化の現状”（神鋼 田中英輔氏），見学会；同社鉄鋼技研及び製鉄所。

第5回，講演会；“食品包装用アルミニウム箔複合材について”（昭和アルミニウム 松崎洋祐氏），見学会；同社彦根製造所。

(4) 材料評価セミナー

化学的評価；金属の腐食と電析の基礎。組織観察；走査電子顕微鏡による破面観察とその解析。X線回折；相の同定と残留応力測定（理学電機）。表面分析；表面・界面，微小分析—その測定原理と評価。

(5) 支部小史委員会

11月13日に発足，第1回会議を開催し，支部小史の編集方針，調査・執筆の分担，スケジュール，予算などの検討，具体案の策定。

(6) 「鉄と鋼」ISIJ情報ネットワーク編集（WG）委員会

第1回会議を開催し，編集方針，執筆分担，スケジュールなどの協議，具体案の作成を行った。

以上，関西支部の活動状況についてその概要を述べた。今後ともに，支部会員にとって魅力ある支部活動を続けていくためには，時流に応じた柔軟な運営を行ない，地域産業との交流を強化し，さらに理工系教育問題についても積極的に参画し，産官学1体となり，関西の特徴を活かした活力ある事業活動を展開していく必要がある。

また関西支部はその規模も大きく，従って本部との連繫をより一層密にし，関連資料や情報の集中管理とそのサービス体制を早急に完備し，さらに事務処理の専門化と合理化を行い，支部の効果的かつ効率的運営を図る必要がある。そのためには定常的な事務局の設置について，再度真剣に討議する必要がある。

* 他の研究会、団体との共催テーマ

** 総会、湯川記念講演会終了後、恒例の支部事業である懇親会が開催された。



好評!! 「材料評価セミナー」

永井 宏
(大阪大学工学部)

「日本鉄鋼協会関西支部および日本金属学会関西支部会員の学術的知識修得の便宜を供するとともに，支部活動の活性化をめざすため」の企画の1つとして，平成3年度に発足した「材料評価セミナー」が，好評のうちに平成5年度で第3回を迎えようとしている。平成2年当時，関西支部の活動をさらに活性化しようという提言がなされ，学術運営小委員会主査長村光造教授（京大工）のもとで種々検討された。当時，講演会やセミナーが大流行で，いたるところで同じようなテーマや形式のものが実施されており，少々マンネリ化している傾向もあったので，当委員会では会員諸兄のセミナーに対する意見や希望を汲み取るため，アンケート調査を実施した。その結果を集約すると，以下のような要望が寄せられた。

- ① 装置（測定器）の使い方，結果の解釈の仕方を知るため。
- ② 社内教育や企業内の再教育のプログラムの一環として。
- ③ 研究手段の探索のため。
- ④ 材料開発のための技術・知識及び先行的知識の習得のため。

上記のアンケート調査結果を踏まえて，講義と実習（演習）を兼ねた「材料評価セミナー」を実施することが決定し，長村光造運営委員長のもと，第1回（平成3年度）は，下記のコースのうち，テーマ(1)～(3)が，それぞれ定員30名で開始された。周知のとおり，関西支部には資金的な余裕はないので，準備金0，テキスト印刷代もセミナー終了後の後払いという交渉の上開始された。当時，支部常任理事として運営委員会に出席していた筆者は，赤字が出て支部会計を圧迫しては困るので，参加費を上げるように提言したのであるが，「収益をあげることを目的とせず，会員の技術，知識の向上を最重点の目標とする。」という委員長はじめ運営委員会の意見で，実習を兼ねたセミナーであるにも拘らず他のものに比して格段に安い15,000円で出発した。委員長は勿論のこと，幹事の大矢龍夫氏（合同製鉄），

世話役の山本橋治氏（同）および運営委員各位のご尽力の甲斐あって赤字を出すことなく、極めて好評のうち実施された。

第2回（平成4年度）は、前年度運営委員会のたびに、常任理事としての立場から、赤字を出さぬように細かい点までうるさく注文を付けたことが、当セミナーの運営に熱心だと誤解されたようで、運営委員長のお鉢が筆者に回ってきてしまい、幹事大谷泰夫氏（住金）、世話役の岩永祐治氏（同）のもとに前年度のテーマ（1）～（3）にテーマ（4）を加えて実施された。当年度も、頗る好評で全国各地から参加して頂いた。お陰でかなりの繰越金を得ることができたので、次年度以降のセミナーのテーマの選定や企画にあたって、赤字を余り心配することなく、少し思い切った企画ができるようになったと運営委員一同胸を撫で下ろすとともに、新しい企画・運営に意欲を燃やしている。

〔実施セミナーのテーマ〕（敬称略）

- （1） X線回折：粉末X線回折法による相の同定と残留応力測定
の原理と実際
講師：田中啓介（名大）、板谷忠夫、小木曾克彦、佐々木勝成（理学電機）
- （2） 化学的評価・金属の腐食と電析の基礎
講師：山川宏二（大阪府大）、工藤赳夫（住金）
- （3） 組織観察：走査電子顕微鏡による破面観察とその解析
講師：駒井謙次郎（京大）、城野政弘（阪大）
- （4） 表面分析：表面・界面、微小分析—その測定原理と評価・解析技術—
講師：深町正利（金材技研）、神野正文、小野清弘、田辺道穂（島津製作所）

随 想

支部活動の思い出

盛 利 貞

（京都大学名誉教授、産業技術短期大学名誉教授）

日本鉄鋼協会に筆者が入会したのは昭和17年1月で、京大工学部冶金学科在学中でした。紹介者として沢村宏先生の署名をいただいたと思います。

当時図書室の司書係の手元に昭和14年4月に東京で開催された鉄鋼協会第21回講演大会の前刷が何冊も保管されており、この前刷には協会への入会申込用紙が綴じ込まれていました。名誉教授の斎藤大吉先生は昭和13年4月から15年3月まで鉄鋼協会会長でしたが、関西支部設立に努力されて昭和14年3月に支部は発足しています。さらに支部会員増をはかるため、当時冶金学第1講座担任の沢村宏先生と連携して支部の会員増加に尽力しておられたため、図書室に入会申込用紙を常備して学生に対する入会のPRが計られていたようです。

筆者が入会した当時の准会員の年会費は入会金込みで8円80銭でした。学生会員が定款に設けられたのは昭和23年9月以降のことで、入会当時は正会員より准会員の人数が会員の過半数を占めていました。なお当時の学卒技術者の初任給月額50～60円に比較して、年会費は割高であったためか分納が可能でした。

大学在学中に支部例会に出席した記憶は1度あり、それは昭和17年7月に大阪で開催された第17回例会講演会でした。沢村

（5） Xα法（分子軌道法計算実習）（予定）

第3回（平成5年度）は、運営委員長佐分利敏雄教授（阪大工）、幹事広瀬裕輔氏（日新）のもとで、さらにコンピュータ実習を伴うテーマ（5）Xα法（担当：足立裕彦教授・京大）を追加して実施される予定である。

毎年、全セミナー終了後、運営委員会を開催し、参加者からの感想アンケートをもとに当年度の反省と次年度の計画について議論するが、「2日間コースにして欲しい」という希望が30～50%もあり、また「参加者が持参した試料を実習に使うに欲しい」等々、積極的な要望が多いが、講義だけでなく実習を伴うセミナーでは、時間、場所、協力者（機関）を得ることが大きな問題であるため、安い経費で如何に充実したものにするか苦慮しているのが現状である。

大好評のうちに当セミナーを運営できているのは、宣伝・案内にご協力頂いている日本鉄鋼協会および日本金属学会や当運営委員各位は勿論のこと、実際に現場でお世話して頂いている講師の方々、幹事、世話役、各セミナー担当運営委員、セミナー開催場所の方々の献身的なご尽力に負うところが極めて大きい。「材料評価セミナー」は、ボランティアに支えられたまだ生まれたばかりの新しい試みである。折しも世の中には、不景気風が吹き荒れ、多くのセミナーや講習会への参加を見合わせる風潮が漲っているが、若い技術者の貴重な学習・実習の場として、ベテラン技術者のリフレッシュ教育の場として、「材料評価セミナー」を主催者側と参加者側の両面から皆の力で大きく育てて頂きたい。また、セミナーを良くするためのご意見やご提案は遠慮なく運営委員会に頂戴したい。

先生が「溶銑を原料として低磷銑を製造する方法に関する研究」と題して講演され、「シェンクという人が云々……」とアーヘン工科大学のH. Schenckの研究論文に何回も触れておられたことは今も記憶しています。

昭和17年9月大学卒業と同時に軍務に服しましたので、戦時中は協会の行事に出席したことはありません。ただし会費は母親が留守宅で払込んでくれましたので会誌は戦中戦後を通じ、継続して入手していました。ただし会誌のうち第30年（昭和19年）10～12号および第31年（昭和20年）1～12号は休刊ですから勿論持合せません。

戦時中ドイツで刊行された学術技術情報資料はドイツの潜水艦によってある程度我が国に輸送されましたので入手できたようですが、米国・英国等の旧連合国側の学術雑誌は開戦とともに入手できなくなり、戦後も1～2年間は戦前のように容易に入手することは困難でした。

大学の研究者や企業の技術者が、戦後外国文献の情報を相互に交換し合い、文献をコピーして個人的に討論するようになったのはおよそこの頃であります。一方鉄鋼協会および金属学会の両関西支部は他地区の支部と同様に戦後本部補助金がきわめて僅少となり実質上ほとんど活動できない状態にあったようです。しかし支部会員中には研究意欲が旺盛ですべて自弁で会合し、関係論文の検討、新文献の紹介、研究相談などの活動を始めようという気運が高まり、戦後はじめて「鉄と鋼」誌および金属学会誌に関西支部会員の研究会活動が会告として掲載されたのが昭和23年7月のことで、この会合が「物理冶金談話会」であります。「鉄と鋼」誌はこの号すなわち第34年7号で、戦後